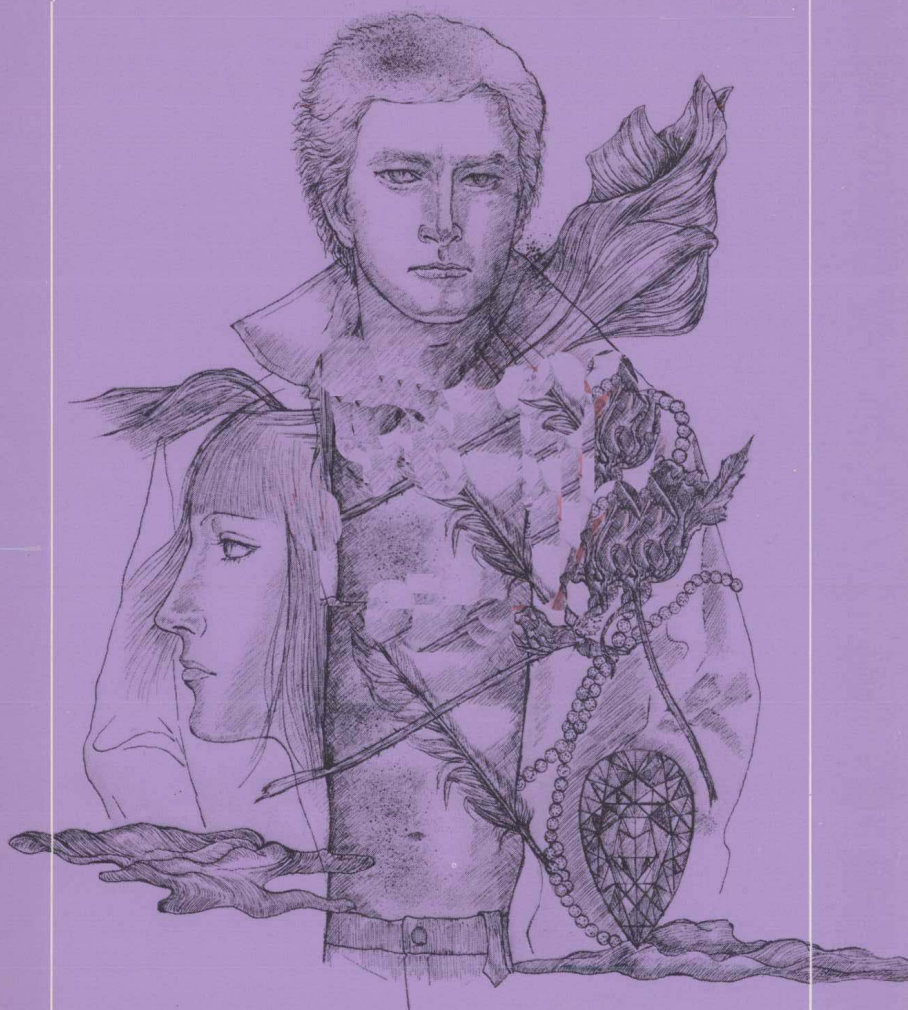




恋塚 加堂秀三



角川書店

恋塚



加堂 秀三

昭和五十一年一月三十日 初版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話(東京) 二六五―七一一(大代表)

郵便番号一〇二 振替東京一九五二〇八

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

目次

第一章 初蟬はつせみ

五

第二章 霧の河

三五

第三章 勾玉まがたま

九

第四章 雨の空港ホテル

一三

第五章 逢魔おうまが時とき

一五

第六章 流鏑馬やぶさめ

一八

第七章 志摩の海は紺青

二〇

第八章 スリランカまで

二四

あとがき

二六

装帧
村上芳正

恋

塚

第一章 初^{はつ}蟬^{せみ}

1

遠く大学の方角で花火があがった。

暗い学園通りには提灯^{ちようちん}行列ができている。

そして、いま水族館の内部めいた駅構内の地下連絡道を通り、夕闇の濃い人出の多いこの副都心の街へあがってきたばかりの、谷口彩子^{あやこ}のすぐ眼のまえでは、ビールと汗と埃とで、顔も頸^{くび}も剥^むきだしの腕までも赤黒くした学生たちが、スクラムを組み、あるいはたたひとりで、蛮声^{ばんせい}を張りあげ、足をもつれさせつつ、男の匂いと男だけが持つ闘争の気組みとを、辺りへ撒[＊]きちらしていた。

春の宵独特の甘ったるいような、悩ましいような生温かい空気が、何十人、何百人とも知れない若い男たちの熱い体に荒くかきまぜられ、練^ねりに練られて、ほとんど眼に見え手でさわること

ができそうなほど、このうえもなく濃密なものになっていく……。

田舎の祭りというものは知っているが、もう長い間その田舎とも祭りの陶醉とも無縁で暮らしている、そういう地方出身の若者たちが大勢住んでいそうなこの街に、ときならぬ祭りが始まったかのようにであった。

彩子には、大学野球についてもリーグ戦についても、何の知識をも持合わせていなかったが、それでもこれほどの興奮の渦に巻きこまれると、やはり冷淡な気持ではいらなかった。

そして、その興奮の感染とでも名づけるよりほかないような感情は、彩子が駅を離れ、野方玖美との待合わせ場所である喫茶店『ピサ』へ近づくにつれ、だんだん昂まり放恣なものになってきた。

彩子はいままでこれほど多人数の酩酊した若い男を、しかも薄闇のなかで、いちどきに見たことがなかった。

それに、学生でありながら不思議なことだが、金属製のボタンが暗く光る、彼等の学生服も珍しかった。

また若い喉を押しあげている白いカラー、それから、ずいぶん不潔そうなのが多い精悍な頭へのつかっている紙の帽子、そんなものも、今日の彩子には悪くなかった。

彩子は、喉が渴いた。

彩子は何かを待っていた。

しかし何を待っているのか、それを自分に問いかけるのは恐ろしかった。

ただ彼女は喫茶店『ピサ』への道を急いだ。ひたすら急いだ。

すると、水を撒かれ、雨あがりのように見える路地に、大学の制帽が落ちていた。

新入生のものなのだろう、鏢つばの美しい、つくりの新しい帽子であった。

喫茶店『ピサ』も母校の勝利に酔う学生たちで満員だった。ここには女子学生も大勢集っていた。

この店はケーキと珈琲とが自慢のはずなのに、今日はどのテーブルにも、申しあわせたようにビール壺が載っている。

「昔はさ、今日みたいな日にはさ、この町じゅうの店という店がね、学生たちにビールをタダで飲ましたんだって」

「あら、まア！　じゃアあなた、昔に生れてきたかったでしょう」

はい、ぎぎった言葉のやりとりが聞こえる店のなかを、彩子は玖美を探し探し歩いて行った。しかし玖美の姿はどこにもなかった。

玖美の姿ばかりか、空席もなかった。

彩子は仕方なく店のまえまで出て、そこで玖美のくるのを待つことにした。そして海岸へでも持っていけば似合いそうな、派手な縞模様の日覆の下に立っていると、寄席やゲームセンターの方角から、雑多な音楽が聞こえてきた。

彩子は、玖美を待っているのだということを、ふと忘れる瞬間があった。

春は、今年二十二になったばかりの彩子にとって、切なすぎる季節であった。また処置ない季節でもあった。

彩子は何度も腕時計へ眼をやった。劇場を兼ねたレストランで開かれるジャズコンサートの開演時刻が、十五分後に迫っていた。

しかし、玖美はなかなか現われなかった。『ピサ』の席がすぐ気配もない。

彩子はやがて心を決めて、『ピサ』の日覆の下を離れた。——離れようとした。そのとき、

「……お客さま、……谷口さまですか」

と呼びかける声が、彩子を追いかけてきた。

彩子が歩きだす姿勢のまま顔だけ後ろへ振りむけると、店のガラス扉のところに、美しく化粧をしたウエイトレスが立っていた。

「谷口さまですか。……お電話がかかっておりますが」

彩子は礼をいって、ウエイトレスと一緒に賑やかな店のなかへ入り、レジスター脇の電話にでた。

「……姉さん？……姉さんなの？」

急ぎこんで尋ねる弟の声が、少し消毒薬の匂いのする受話器から聞こえてきた。

彩子は動悸がした。不吉なものが、胸を走った。

「大変なんだ、兄さんが、……兄さんがね、怪我したんだって」

弟がつづけた。

弟の晃は彩子より三つ年下の十九だが、電話で声だけ聞くと、歳よりずっと稚く感じられる。ことに今夜の彼は、彩子に伝えようとしている事柄が事柄なので、声がほとんど中学生のようになつていた。

もっとも、彩子自身も甘えん坊のほうで、晃に比べて格別性格がしつかりしているというワケではなかったが、それでもいまは割合落ちついて、兄の英治の怪我の様子や、かつぎこまれた病院名を、尋ねることができた。

「……うん。いまさっき、会社から電話があつたんだよ。兄さんね、今日、向ヶ丘遊園？ あつちのほうの現場へ出かけたんだって、——なにも兄さんが出かける必要はないのに出かけたんだって……。そして、現場でなにかの下敷きになつたらしいんだ」

晃が興奮から、稚く聞こえるわりには大きすぎる声で話した。

彩子は悪い予感が的中した、その眼のまえが暗くなるような感じと闘った。

「母さんはいま出かけた。父さんも会社からまっすぐ行くと思うんだ。ぼくが連絡したから……」

「そう、ありがとう。じゃアわたしもすぐ行きます」

彩子は、ひとの出入りが多いレジスターの脇で長話もできないので、そういつて電話を切った。そのとき、玖美が勢いよくガラス扉を押して入ってきた。

「ごめんなさい！ 遅くなっちゃって」

玖美は彩子よりひとまわり大柄で肉づきがよく、白粉おしろいっ気のない顔に口紅だけ濃くつけていた。彼女は、服装も派手なもの、華やかなものを好んで身につけるむぎがあった。

いまでも、肉体の豊満な娘がひとり現われたというよりは、赤いスリーピースそのものが、扉をあけて入ってきたかのように見えた。

彩子は玖美を店の外へ連れだして、コンサートへ行けなくなった事情を手短に話した。

「……怪我！」

玖美が、路地を行くひとが振りかえるような声をだした。

2

酔い痴いれた学生たちを駅構内から立ち退かせるためだろう、厳いふしい身仕度の警察官が八、九人、ひとの出盛りの地下連絡道へ現われたときだった。彩子が改札口入ってすぐのところまで振りかえって、一瞬玖美のほうを強く見た。

笑おうとしたらしいが、笑いからは遠い表情であった。

玖美は改札の柵さくごしにその彩子を見返して、思いがけない嫉妬を感じた。

彩子の、眉のかくれる長さに切り揃えられている前髪の下、美しく濡れた黒目がちの大きな眼には、いまにも泣きだしそうな表情があった。そして、青ざめているので普段よりいっそう色白に見える、面長な顔や華奢な立姿には、女の玖美が見ても救いの手を差し伸べてやりたくなる

ような、同時にまた、思いきって意地悪なことがしてみたくもなるような、いうにいいない愁いと儂い風情とがあった。

やがて玖美に背をむけて歩きだした彩子の髪の艶、形のひっそりした背中の様子も、少女少女として捨て難かった。

玖美はまさかサッフォー主義の感情からでもないだろうが、惚れぼれして彩子の後姿を見送りながら、ほんの少し彩子のその美しさを憎みもした。

しかし、しばらくして、彩子の姿が人波にまぎれ、見えなくなると、玖美の心に、自分のいましがたの気持の動きを恥じる感情が生れた。

谷口彩子は玖美が神田の女子大学へ入ってから知り合った友達で、無論高等学校はべつべつだったが、教室でも街でも、およそ気分にも、おのれない、することに陰日向かげひなたのない同級生であった。

二人は英文学科へ籍を置いて、ブロンテ姉妹のことなどかじっていた。そして大学へ通うかたわら、ともども御茶の水にある絵画教室へ行つて、油絵を描くようになった。そういう趣味の点でも、二人は気分がぴったり合った。

また彩子は、玖美のいうことやすることに顔を赤らめ、感嘆の眼をみはることはあつても、決して嘲笑や批判らしい気持を見せたりはしなかった。

もっとも、玖美にいわせれば彩子は万事が少女趣味で、ナルシズムいっぱいで、なにか未知のものや荒荒しいものに自身を晒し、傷つくかも知れないがその傷の分だけ逆に強くなる、そういう生き方とは無縁の娘だったが、それは、さまざまなことに出どころのわからない焦りと苛

立ちとを感じる、最近の玖美がそう思うだけで、実際は彩子にも、しの強いところがあるのかも知れなかった。

ともかく、彩子は少女期をすぎてからできた友達としてはまず申し分がなかった。玖美は、その彩子を一瞬だけでもせよ妬んだり憎んだりした自分を、誰へともなく深く恥じた。

よほどたつて、日の暮れきった街へ出てから、玖美はジャズコンサートのことを思いだした。同時にターミナルの大時計へ眼をむけたが、いまからひとりジャズを聞きに行く気にもなれなかった。

この灯のまばゆい、春風の甘い街には、ジャズよりもっとスリルに満ちた、もっと刺激の強いことが、無数にあるのではないか。——玖美は漠然とそんなことを考えた。そしてアーク灯の白っぽい光が映えて美しい、縞模様のあるスクランブル交叉点を、映画館街のほうへむけて渡りはじめた。

そのとき、ひとりの男が明らかに偶然を装って、玖美の胸もとへ肩をぶつつけてきた。

「あ、ごめん」

甘えたような声でいう男を見ると、相手はまだごく若かった。夏を先取りしている気なのか、純白の、肩に大きなバットの入った服を着ていた。

玖美は、彩子なんかには決していいないことだったが、その体の細い、顔も細い、性質の軽薄、そんな若者に惹かれた。

彩子が病院へ着いたとき、兄の英治はまだ意識を取り戻していなかった。頭も胸も包帯でグルグル巻きにされ、酸素吸入器を鼻と口に当てがわれ、大勢の医師や看護婦に見守られて、ベッドへ仰臥させられていた。そして、ときおり今日のように現場を見まわるからだろう、日焼けした顔には、油でも塗りつけたような汗が浮かんでいた。

彩子は、無言で手を握りにくる母の手をきつく握り返して、息を吞んだ。そして、兄はこのまま帰らないひとになるのではないかと、ひとり気を揉んだ。

短時間の間に母が面変わりしてしまっている、そのことも、彩子の心を衝いた。

「……どうしたの、いったい。……兄さんいったいどうしたの」

彩子は医師たちが引きあげていくとすぐ、押し殺した声で母に尋ねた。

「彩子。……それがお前」

母はそれだけいいさして眼に新たな涙をため、色の失せた唇を震わせた。

「事故じゃないんだよ。事故じゃないらしいんだよ。会社のひとは体面上、事故ということで何もかも手配してくださったそうだけど、どうやら事故じゃないらしいのよね」

母は兄が四、五人の若い男に襲いかかられ、鉄製の棒や煉瓦で殴られたらしいことを話した。今日午後遅くのことだという。

「現場のひとたちが駆けつけてくださったときには、殴りかかった若い者が、もうみな引きあげたあとだったんだって……。いまさっきまで、会社の方もおられたただけだね。——英治は現場が見えだしたところで、寄ってきたヤクザ風の男に車を止められ、車から降ろされて、殴られたらしいって……。なにしてるのかしら、お父さん遅いわね。——晃は？ 晃、くるっていった？」

母のいうことは、取りとめがなくなっていた。話に脈絡がなく、注意があっちこっちへ飛んだ。彩子は、平素からあまり丈夫でない母の体を気づかった。

「……どうなんだ」

彩子が言葉をつくして、ともかく母を椅子へ腰かけさせようとしているところへ、父がやってきた。しばらくして晃もきた。

親子は四人して、まだ意識の戻らない英治を見守った。そして四人とも声をたてずに、それぞれに泣いた。

「谷口の家は英治を頭かしらにしてだな、上下うへしたに男、まんなかに女。——どうだい、理想的な子柄こがらだろうかな」

父は何かというときと彩子たちにそう自慢したがった。

その父の自慢の、「英治を頭に」という言葉には、二重の意味があった。

長男の英治は学校の成績でも行儀作法でも、また大学の建築学科をでてからの仕事ぶりや両親